HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	食生活の近代化と伝統的身体観・健康観の変容 ： トンガ健康減量大会の事例研究
Author(s)	井上, 昭洋
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 105, 1-49
Issue Date	2001-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34005
Type	departmental bulletin paper
File Information	105_PL1-49.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 105 (2001)

食生活の近代化と伝統的身体観・健康観の変容：
トンガ健康減量大会の事例研究

井 上 昭 洋

> Why did you say that mutton flap is dangerous rubbish and Tiko is the garbage dump of New Zealand? You're a Wise Man and a Rich Man. Ignorant Men are poor. You eat eggs and bacon for breakfast and fillet steak for dinner. We can only afford mutton flap. So what if you don't eat eggs and bacon for breakfast and fillet steak for dinner? That's beside the point. The truth is that you, doctor, can afford to buy those things any time; and you can afford to go around saying nasty things about mutton flap. You can buy the world, but we can only take the flap. We eat and love it. It's a matter of getting used to what you can buy.
>
> Epeli Hau'ofa, "Tales of the Tikongs" 1988 [1983]

1．はじめに

南太平洋島嶼国では，食生活を含むライフスタイル全般の近代化・西洋化が進むにつれて様々な生活習慣病が問題となってきている（Bindon 1995; Pollock 1995b; Taylor, et al. 1992)。トンガ王国もその例外ではない。なかでも肥満は同国において一つの社会問題となっており，その対策が急務とされ，健康教育の一貫として「トンガ健康減量大会」が国をあげて行われている。食生活の変化に起因すると考えられる肥満の問題をトンガ人がどのように認識しそれに対応しているかについて文化人類学的に考察することは，単にグローバリゼーションのローカルな現象の一事例を示すだけでなく，西洋近代の生み出した健康概念を相対化し再検討する際に有効な視点を与えるも

のと考える。

本研究の目的は，トンガ人の伝統的な健康観，身体観，食物観が，近代化・西洋化の過程で変容しながらも，肥満という問題に対峙する際にどのように動員されているかを減量大会参加者の語りの中に見いだすことにある。換言すれば，彼らの語りの分析を通して，西洋近代の生んだ「健康」概念および「健康管理」の言説がトンガ社会においてどのように受容され流用されているのか，それとも抵抗され拒絶されているのかを具体的に考察することを目指している。このような研究は重要である。なぜなら，「肥満」概念，身体観，健康観に関するこれまでの理論的研究の多くが無条件に西洋社会を前提としていると思われ，それら従来の研究分野に対してこの研究は新たな視点を提供することができるからだ。

1999年10月と2001年2月の二度にわたってトンガ王国の首都ヌクアロファにおいてそれぞれ短期間の聴き取り調査を行った。その調査で得た知見に基づき，本論文は，トンガ人の食生活の変化およびその現状について概観し，「トンガ健康減量大会」が開催されるに至った背景やこれまでの経過を紹介して，現在彼らが抱えている問題点を指摘したい。さらに大会参加者のインタビューから得られた情報を加えて，非西欧社会における近代化・西洋化と身体観・健康観の変容という問題についてより詳細な研究を展開するための予備的な考察を行いたい。

2．トンガの食生活

2－1．トンガ王国の概要

南太平洋に浮かぶ大小169の島々（うち36の島に人が住む）からなるトンガ王国［図1］はタウファアハウ・ツポウ4世を元首に戴く立憲君主国家である。総面積約747平方キロメートルの国土に約97,800人が住み，そのうち約69%の66,900人が首都ヌクアロファのあるトンガタプ島に居住する(1996年現在)。人口は1970年代中頃に9万人を突破し，以来四半世紀の間に漸次増加しているが［図2］，国内総人口と同じ規模のトンガ人が海外（主に

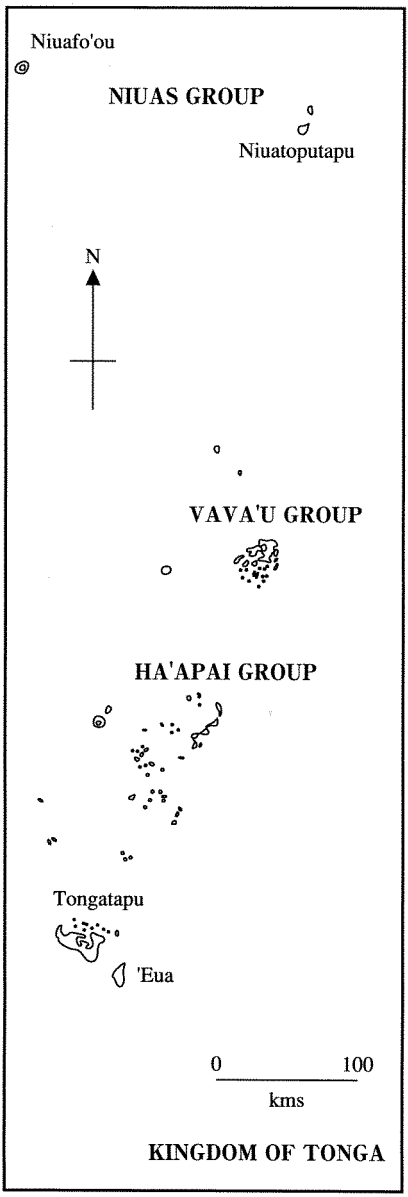
Niuafo'ou
NIUAS GROUP
Niuatoputapu
N
VAVA'U GROUP
HA'APAI GROUP
Tongatapu
'Eua
0
100
kms
KINGDOM OF TONGA

図 1

ニュージーランド，オーストラリア，合衆国）に移民社会を形成していると言われる。彼らの本国への送金は国の重要な収入源の一つである。主な輸出品としては，日本向けのカボチャ，合衆国，オーストラリア，ニュージーランド向けのカヴァ（コショウ科の潅木の根を乾燥し粉末状にしたもの；水に溶かして作る麻酔性飲料としてオセアニア地域で広く飲用される），合衆国向けの魚介類などがあるが，ニュージーランド，オーストラリア，合衆国からの輸入に依存する典型的な輸入超過国である（Statistics Department 1999, 2000a, 2000b; Lal and Fortune 2000）。

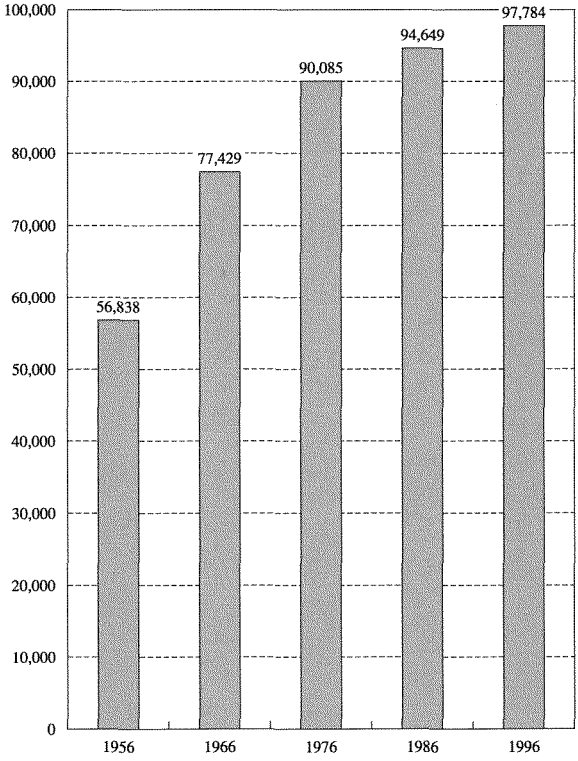

図 2. Population of Tonga

2－2．トンガ人の伝統的食生活の変容：先行研究の再考をかねて

足立（1986 b）も指摘するように，トンガ人の伝統的な食事は，1）イモ類（タロ，ヤム，キャッサバ，サツマイモ），2）魚介類，3）ココナツ（ココナツミルク，ココナツジュース）の「3つのキーフーズ」に，バナナ類，パンの実，ルー（タロの葉）やペレなどの野菜類などが加わったものである。炭水化物はイモ類から，タンパク質は魚介類（および饗宴で食される豚肉など）から，脂肪はココナツクリームから，また各種ビタミンおよびカルシウムは数種類のイモ類からそれぞれ摂取される。足立（1986 b），山本（1986），山本他（1984，1985），小池（1984）によると，トンガ人の伝統的な食生活は栄養学的にみてバランスの取れたもので，トンガ社会の近代化・西洋化が進行する以前は，彼らは健康的な食生活を送っていたことになる。しかし1977年から1983年にかけて行われた彼らの調査によって指摘されたのは，この伝統的食生活が，小麦粉，シピと呼ばれる冷凍羊肋肉，コンビーフなどの缶詰類，バターや甘味飲料などの精製加工品，などの輸入食品が入ってくることによってそのバランスを失っていったという点であった。すなわち「見かけでは食物の広がりが多く，新しい近代的な食物も多くなっているのに，逆に栄養素の摂取不足の問題が多くなるという不可解な現象」（足立1986 b：18）が食生活の近代化の過程で起こっており，そのため様々な健康栄養問題が発生しているとされたのである（ただし，彼らの研究では肥満の問題はそれほど強調されていない）。

足立（1986 b）と山本他（1984，1985）は，離島の村と首都ヌクアロファの食生活を共時的に比較し，都市部ではイモ類の摂取量が少なくなりそれに伴って伝統的な食物の摂取量が減っているが，近代的な食物（輸入食品）がそれら不足分を補っていない点を指摘する。すなわち，都市化が進む中「イモのない食事では，イモがパンに置きかわるだけでなく，一緒に組み合わされることの多かったココナッツや魚貝類が少なくなり，にもかかわらず近代的な食物の野菜や乳，肉，卵などが組み合わされていない」（山本他1984：21）状況が生じているというわけだ。都市化に伴う食生活の近代化によって伝統的な食生活のバランスが崩れる（そしてトンガの場合，近代的な食品が

その崩れたバランスを補正する方向に働かない）という図式そのものは明解である。事実，そのような見地から1980年代以降の第三世界における健康栄養教育は伝統食の見直しを重点的に行ってきたとも言える（足立1986c）。

しかし，沿岸農村部と都市部の共時的な比較調査によって通時的な社会変化（都市化・近代化）の説明を無批判に行うと，19世紀の古典的な社会進化論者の安易な比較法の例を待つまでもなく，誤った結論を導きだす可能性がある。例えば，都市化が進むとイモを中心とした伝統的な食生活が崩れ，その過程で魚介類の摂取量も減るという通時論的な説明も，魚介類が容易に手に入る沿岸農村部と現金，魚市場への交通手段といった条件がそろわなければ魚介類を手に入れられない都市部の共時的な比較から導き出されていることを考えると（少なくとも減少する魚介類の摂取量の説明については）説得力を持たなくなってしまうだろう。魚介類の摂取量の違いは，漁村部と都市部の地域差に還元されるからだ。山本他（1984）は，ハカロロイ（イモ，バナナ，魚，肉のココナツミルク煮）からパンと紅茶だけの朝食へという都市化に伴う食生活の変化を指摘するが，先述したようにこれは沿岸農村部と都市部の比較調査から導き出された結論であり，同一地域の通時的な調査によって導き出されたものではない。都市部に居住する年配者への聞き取りなどによって1950年代から60年代にかけての食生活がどのようなものであったかを押さえ，得られた結果を農村部と都市部の比較調査から導き出された結論と照らし合わせる作業が必要とされよう。

彼らの研究について，さらに幾つかの問題点を指摘しておきたい。トンガの食生活では元来，一日三食，規則正しく食事を取るという習慣はない。「トンガ人は時間通りには食事はしない」というのが，自らの食生活を説明する時に彼ら自身の口をついて出る言葉である。三食規則正しく食事を取る習慣のない彼らの食生活を研究する際に，朝食，昼食，夕食という我々の常識とする食事の枠組みをそのまま無批判にあてはめて質問票調査を行ったり，それに基づいて分析を進めると，彼らの食生活を考察する際に支障をきたすことになる。元来，朝食，昼食，夕食という考え方のなかったトンガ人の食生活について，「朝食は全般的にイモを食べる人が少なく夕食でイモを食べてい

る人が多い」と指摘することがどれだけ意味のあることなのかを考える必要はあろう。

また，一週間を通してみた場合，ウム料理（オセアニア地域で広く行われる石焼き料理）が行われる日曜日とそれ以外の曜日とでは食事の量や内容がかなり異なってくると考えられる。さらにウム料理のあった次の日の午前中の食事は前日の残り物が中心になる可能性があり，そうでない日の午前中の食事と内容に違いが出てくる。一年を通してみた場合も，12月から1月にかけての夏季休暇期間（クリスマスシーズンでもある）やウェスレー派キリスト教教会の年次総会が開かれる5月は頻繁に饗宴が行われる時期なので，それ以外の時期と比べて食生活に違いが出てくる可能性がある。

作物の季節性および天候（特にハリケーンなど）が作物に与える影響についても考慮しなければならない。タロ，キャッサバ，サツマイモは年間を通して収穫されるが，ヤムは1月から10月，パンの実は12月から4月が収穫期である。また，水に弱いキャッサバ，風に弱いバナナ類はタイフーンの影響を受けやすい。各島とも大型タイフーンの直撃を受けるとバナナやキャッサバに限らず作物全般が被害を被り，島民は米と小麦粉を代替の主食とし極端に野菜の不足した食生活を強いられることになる。ハリケーンの影響はマーケットの様子に如実に現れるので調査者が見落とすことはないだろうが，各作物の季節性および年毎の収穫高の変化について留意する必要がある。

以上述べたように，トンガ人は元来一日三食規則的に食べる習慣がなく，一週間の間にも彼らの食事内容に大きな偏りが出る要素があり，一年のうちでも饗宴が頻繁に行われる時期とそうでない時期があり，それぞれの作物にも季節性がある。これらの諸条件を考慮に入れずに食事調査を安易に行っても彼らの食生活を正確に描写することはできないだろう。よって，仮に24時間想起法を用いた質問票による食事調査を行うのであれば(ここでは24時間想起法それ自体がかかえる問題点についてはあえて問わない)，どの時期，どの季節，どの曜日に調査を実施するのかについて十分に注意を払わねばならない。例えば，3月第1週の離島の漁村部の月曜日の食事と本島の都市部の火曜日の食事を比較することで都市化に伴う食生活の変化を論じることが早

計に過ぎるのは，以上の説明からも明かであろう。

ここではこれ以上，足立（1986 b）と山本他（1984，1985）の先行研究の詳細な検討を続けるつもりはない。輸入食品の流入によって伝統的な食生活のバランスが崩れてしまったこと，近代的な食品が崩れたバランスを補正する方向に働いていないこと，伝統的な食生活においてイモ類が他の食物をバランス良く取り入れるという役目を果たしていたこと，などの指摘について特に異論を唱える必要はないだろう。また，彼らの研究や1986年に行われた国勢栄養調査の報告書（Committee 1987）が指摘する，午前中の食事はパンを中心とし夕方から晩にかけての食事はイモ類を中心としたいわゆるトンガ食になるという基本的な食生活のパターンは，今回の調査でも依然として変わっていないように感じられた。

ところで，調査で得た私の個人的な印象では，足立（1986 b）と山本他（1984，1985）の1980年代前半の食生態学的研究で主張されるほど，現在のトンガ人の食生活においてパンがイモ類に取ってかわっているようには感じられなかった。推論の域を出ないが，近代的な食品が入ってくる以前のトンガの伝統的な食生活において，午前から夕方までの食事は量，質ともに軽いものであって，夕方から晩にかけての食事（一度とは限らない）で一日に必要とされる摂取量のほとんどを満たしていたのではないだろうか。パンが彼らの食生活に浸透したとしても午前から夕方にかけての軽い食事においてであって（その軽い食事が食生活の近代化によって「重く」なった可能性はあるが），いわゆる「夕食」でイモ類に取ってかわるようなことはなかったのではないだろうか。以上のような仮説的な解釈を安易に展開すべきではないが，アンケート調査や年配者へのインタビューによってある程度この解釈の妥当性を検討することができると思われる。食生活の変化の因果論的説明の文脈でイモ類の欠落をその原因にもってくるだけでは，ミクロなレシピレベルでの変化の説明にしかならない。仮にイモ類の摂取量がトンガ人の食生活の中で決定的に減少しているとしても，それをより広いコンテクストすなわちトンガ社会の近代化というプロセスの中で捉える必要があるだろう。

2－3．トンガ人の食習慣および現在の食生活

先にも述べたように元来トンガ人は三食規則正しく食べる習慣がなかったようであり，現在も少なくとも都市部においては朝に食事を取らないことも多く，取ったとしても食パンにバターそして紅茶といった軽いものである。事務従事者の場合，午前中の職場のティー・ブレイクでケケと呼ばれる揚げパン菓子や食パンを食べ，昼休みに食事を取る場合はサンドイッチなどを買ったり作ったりして食べるか[写真１]，経済的に余裕があれば外食ランチを取る。そうして帰宅後にイモ類，ホパなどのバナナ類，季節によってはパンの実などを中心とした大量の食事を取る（そしてしばしばその後すぐに就寝する）というのが典型的な一日の食事のパターンである。この夕方から晩にかけての食事では，イモ類，バナナ類，パンの実に加えて，シピ(羊肋肉)，コンビーフ，鶏肉などのタンパク源，およびキャベツ，タマネギ，トマト，キュウリなどの野菜類が加わる。回数は必ずしも一度とは限らないようである。私が1999年10月に泊まったヌクアロファに住むトンガ人の家庭では，

写真１．都心の商店で販売されるケケ，サンドイッチ，ハンバーガーなどの軽食類

一週間のうちに二度ほど夜の食事を二回に分けて取っていた（ちなみにイモ類が欠落した夕方から晩にかけての食事は一週間中一度だけだった)。例えば，一度目は午後5時前にヤムにキャベツとコンビーフの野菜炒め，二度目は午後9時過ぎにヤム，鶏肉とトマトその他の野菜を煮たもの，そしてレタスとトマトの生野菜といったものであったが，どちらも平均的な日本人にとっては一食分として十分な量であった。ニュージーランドに10年間暮らしていたという彼は「トンガ人はお腹がすいたら作って食べる」「トンガ人は時間通りに食事はしない」と笑って答えたが，それに加えて「トンガ人は（食べ物が）ある時に食べる」ということを彼らの食習慣を表す常套句としてあげることができるかもしれない。夕方食事を済ませた後，友人知人宅を訪れることになった場合，そこで食事を振る舞われればしっかりと食べるというのが彼らの習慣であり，文化的にも期待された行為と考えられる。

ところでトンガ人の食習慣でしばしば指摘されるのが脂肪分・食物油への嗜好である。「バターを1本そのまま食パンに挟んで食べる」「ツナ缶を開けるとまず油を飲み干してから中身を取り出す」「シピ料理の鍋に残った油をスプーンですくって飲む」など，彼らの脂肪分への嗜好がやや大袈裟に語られることがあるが，これらの表現が必ずしも全くの誇張とは言えないほどトンガ人の脂肪分・食物油への嗜好は強い。彼らの最も好むイモ類の食べ方に「ペケ・ンガコ」(peke ngako：イモ類をラードなどの食物油につけて食べる）と呼ばれる食べ方があり，脂肪分への嗜好は文化的なものであるとさえ言われる（Fusimalohi 1997: 314)。この嗜好に合致したのがシピと呼ばれる羊肋肉であった。ニュージーランドでは脂身が多く食用に適さないとされたこの冷凍羊肋肉は，1960年代の終わりにはすでにトンガに輸入されていたと考えられる(入手した資料では70年代前半にはかなりの量を輸入していたことが分かる)。トンガ人の食生活の変化に伴う肥満の問題を論じる際に常に槍玉にあがるのがこのシピである。トンガ人の嗜好に合った値段も手頃なこの羊肋肉は，おそらく1980年代前半には彼らの食生活にしっかりと浸透し，幼少期からその味に慣れ親しんだ彼らにとって欠かせない食品になっていたと思われる。健康栄養面からシピの問題点が指摘されても，安価でトンガ人の嗜好

に合ったシピの輸入量は1990年代に入るとさらに急増し，1994年には3,885トンとピークに達した［図3］。

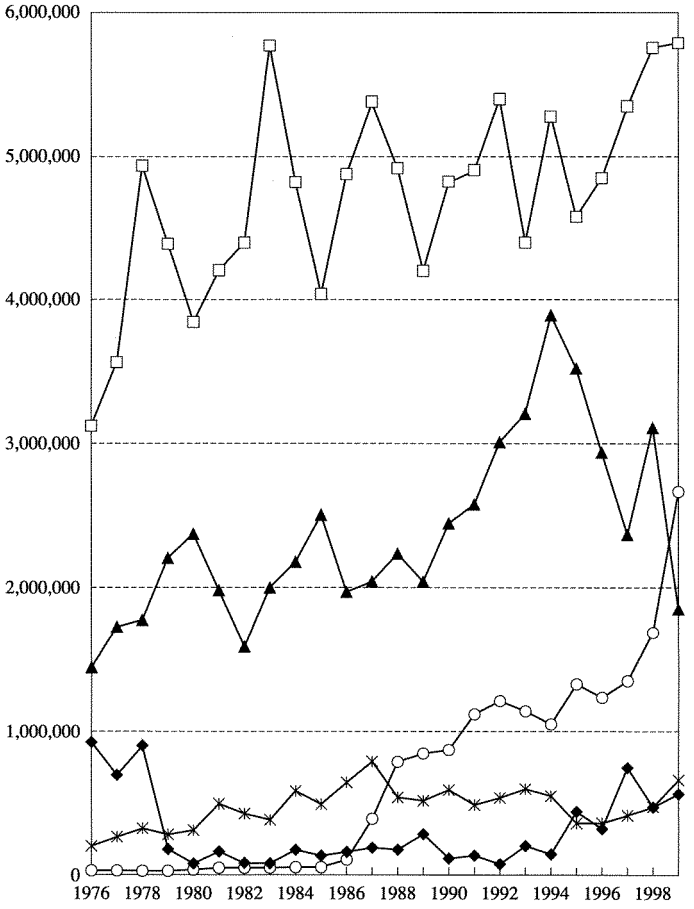

図3. Tonga Imports: Flour and Meats (kg)

Flour — Beef* — Mutton Flaps — Poultry** — Corned Beef

*Briskets, mince, steak and thin flanks combined.
**Whole and pieces combined since 1987.

冷凍羊肋肉の輸入量はその後減少の傾向にあるが，それが輸入規制によるものか，世界経済レベルでの要因が働いているのかは不明である。一方，1987年以降，合衆国からの冷凍鶏肉の輸入量が着実に増加し，1999年にはついに冷凍羊肋肉のそれを逆転する［図3］。1997年には都市部のファレコロア（小売店）でキロ当たりシピが約T$2.80，鶏肉が約T$3.80であったが（山本1997），1999年10月の時点で鶏肉の価格がシピの価格を下回るようになり（シピ約T$3.00，鶏肉約T$2.80），2001年2月にはその差はさらに広がる傾向にあった（シピ約T$3.30，鶏肉約T$2.60）。依然としてトンガ人のシピへの嗜好は強いと言われるが，鶏肉の値段の低下と近年の国をあげての健康栄養教育の効果を考えると，トンガの食生活は新世紀に入り新しい変化を向かえる可能性がある。

トンガ人の脂肪分への嗜好と並んでよく語られるのが砂糖・甘味料の使用量の多さである。紅茶やコーヒーに入れる砂糖の量は，日本人の感覚からすると「食パンに挟まれる1本のバター」に匹敵するぐらいの量であると言って良いかもしれない。また，本島のトンガタプでは，アイスクリーム，菓子類，清涼飲料の消費量も多いと指摘されている（Committee 1987）。一方，小麦粉の輸入量も年によりばらつきがあるが年々増加の一途を辿っている［図3］。食生活の変化を語る際にシピほど前面に出てくることはないが，小麦粉は，食パン，ケケ，ケーキ類，トーパイ（ココナツクリームや砂糖入りシロップをかけたゆで団子），さらにスープのとろみづけに使われたりとトンガ人の食生活の全般に浸透している。そして，食パンに付けられるバター，ケケを揚げるのに使われる食物油，ケーキに使用される砂糖と，彼らの食生活の栄養面での変化に間接的に影響を与えていると考えられる。年によって小麦粉の輸入量が急増するのは，ハリケーン災害による食糧不足を補うために大量に輸入されることがあるからかもしれない。例えば，1983年に輸入量が急増したのは，ハリケーン災害後に国際援助で大量の小麦粉が国内に持ち込まれたためと思われる（足立1986 a）。1970年代中頃以降，四半世紀の間のトンガの人口増加は1万人に満たないのに対し，小麦粉，（1994年以降は減少傾向にあるものの）羊肋肉，鶏肉など，これらの食品の輸入量の増加には目

を見張るものがある。

一方，伝統的なトンガの食生活において主なタンパク源であったとされる魚介類の消費量は，やはり山本他（1984）や足立（1986 b）の指摘どおり，今回の都市部における調査でもかなり少ないという印象を受けた。「魚は高い」「魚市場まで買いに行かなければならない」「若者は，生や油で揚げたものはともかく，煮込んだ魚は好きではない」「この数週間ほとんど食べていない」など調査中に耳にした彼らの意見からも，都市部のトンガ人の食生活の中でシピ，鶏肉，コンビーフと比べて魚介類の占める割合が小さくなっていることがうかがわれる（cf. 村上 1999）。先にあげたヌクアロファに住むホストファミリーの家庭でも，一週間の間に魚が調理されたのは二度で，そのうち一度はメインディッシュの付け合わせとしてであった。シピ，鶏肉，コンビーフはいつでも必要な時に気軽に近所のファレコロア［写真 2，3］で買うことができ，また調理法も比較的簡単である。一方，都市部において魚介類は値段が高く，また朝早く市場に行かなければ新鮮なものが購入できない。よって魚は前もって計画を立てて買う傾向があるかもしれないという声も耳にした。

トンガ人は元来野菜を食べる習慣がなかったと言われる。しかし，1999 年 10 月と 2001 年 2 月の調査期間のヌクアロファのタラマフ市場［写真 4，5］には，ルーやペレに加えて，キャベツ，トマト，キュウリ，タマネギ，ネギ，ニンジン，トウモロコシ，など多くの野菜が並び，1999 年調査時のホストファミリーの午後遅くの食事もそのいずれかの野菜とシピや鶏肉の炒め物または煮物が好んで調理されていた。これら比較的新しい野菜がいつ頃からトンガ人の食生活に浸透し，現在どのような位置を占めているのかについて十分に調査を進めていないが，それらは確実に彼らの食生活の中に取り込まれていると考えられる。

写真２．ファレコロアの店内（缶詰類，パン，シピなどの食料品から日用雑貨にいたるまで販売される）

写真３．ファレコロアにシピを買いに来た青年

写真 4．土曜の朝のタラマフ市場（2001 年 2 月）

写真 5．タロ，ココナツ，バナナ，ルーに加えてトウモロコシなども市場に並ぶ

3．トンガ健康減量大会

3－1．減量大会開催の背景

1986年の国勢栄養調査に基づく報告書は，成人の肥満（および過体重）がトンガ王国における主な栄養学的問題であり，特に男性よりも女性にとってこの問題が重大であり，中年女性の多くが肥満の問題を抱えていると指摘している（Committee 1987）。食生活については，予想された通り，都市部の住民が輸入食品に依存する傾向があるのに対し，農村部の住民はローカルの食物をより多く摂取していることが判明した。この調査報告も指摘するように，太平洋諸島地域における従来の医療人類学的・食生態学的研究の多くは，都市部における輸入食品への依存度の増大および運動不足になりがちな生活様式が，農村部に比べて都市部においてより肥満が顕在化する原因であると結論づけている。しかし，トンガの場合は，ローカルの食物をより多く摂取しているはずの一部の農村部の住民の方が都市部の住民よりも肥満の傾向にあることが，この栄養調査によって分かった。同じ農村部でもニウアス諸島では国内で最も肥満の比率が少ないのに対し，ハアパイ諸島では肥満の傾向が都市部のそれより若干高かったのである（ハアパイの人たちは大柄だとよく言われており，同諸島の住民が元来大柄で肥満の傾向を示していた可能性はある）。報告書は，ハアパイ諸島の肥満の問題は，食生活よりもむしろ活動レベルや生活様式に起因するものであるとし，伝統的な食生活から輸入食品をベースにしたより近代的な食生活への移行が必ずしも肥満増加の引き金にはならないと結論づける（Committee 1987: 55）。すなわち，摂取される食物の種類（輸入食品かローカルの食物か）が肥満の増加に関係していることを示す証拠は見当たらず，肥満の原因はむしろ摂取される食物の量，運動不足，それらに連関した生活様式であると見なされたのである（Committee 1987: 69）。また，都市部において予想されたほど肥満の問題が進行していないのは，健康的な生活の必要性がより意識され，適度な運動やローカル食物の摂取といった生活様式の改善が進んでいるためとされた（Committee 1987: 56）。

この調査では，欧米（白人）社会における標準体重のBMI（Body Mass Index）値がそのままトンガ人の肥満の定義にも使われており，報告書ではトンガ人の身体に合わせた標準体重値を新たに設定する必要性が指摘された（Committee 1987: 70）。しかし，肥満による心疾患や糖尿病といった生活習慣病の増加は衆目の一致するところであり，たとえば心疾患による死亡率（人口10万人対）は1982年の31.6から1994年の151.3へと約5倍に増加している（松村1999）。また，ヌクアロファの国立ヴァイオラ病院は，増加する外来患者に対応すべく1995年に糖尿病クリニックをセンターに昇格させたが，94年までのクリニックの年間外来患者数が約50名だったのに比べ，97年には1,300名がセンターで患者登録をしたという（山本1997; cf. Palu et al. 2000）。この患者数の急増は，罹患率の上昇というより，糖尿病についての認識が高まったためだと思われる。このように，かつては「健康な肥満」「堅太り」などの言葉で形容されていたトンガ人の大柄な体格が，生活様式の近代化に伴って欧米社会で見られるような生活習慣病に冒され始めたという認識が1980年代中頃から90年代に入ると確固たるものとなり，健康管理の重要性が叫ばれ出したのである（全国食糧振興会1986）。たとえば，国王ツポウ4世が食餌療法と運動で200 kg余りあった体重を130 kgまで落としたことは，トンガの抱える健康問題とその解決策を象徴的に表す出来事としてしばしば言及されるところである（古賀1997；山本1997）。このような健康意識の高まりの中，そして依然として解決されない肥満の問題に対処すべく始められたのが，「トンガ健康減量大会」であった。

3－2．減量大会の概要とその経過

この減量大会は，肥満に起因する心疾患や糖尿病などの問題に対処すべく健康キャンペーンの一環として1995年に開始され，2000年で第6回を数える［表1，図4，5］。トンガ全国食糧栄養委員会が企画し，中央計画局が運営する大会であり，約半年間の大会期間中に参加者がどれだけ減量できるかを競うと同時に，国民に健康的な生活の重要性を知らしめる教育的効果を狙ったものである（Englberger et al. 1999）。当初，肥満は都市部の事務従

表 1.Tonga Healthy Weight Loss Competitions

	1st (1995～96)	2nd (1996)	3rd (1997)	4th (1998)	5th (1999)
# Weigh Stations	15	26	36	28	26
# Participants Registered	983	1,313	1,133	1,206	982
(male)	284	n/a	341	375	365
(female)	699	n/a	792	831	617
# Participants Completing	322	652	643	660	599
%(Completing／Registered)	32.8%	49.7%	56.8%	54.7%	61.0%
(male)	119	207	172	195	206
(female)	203	445	471	465	393
# Participants Losing Weight	229	367	361	326	227
%(Losing Weight／Completing)	71.1%	56.3%	56.1%	49.4%	37.9%
Total Weight Lost(kg)	1168kg*	1335.7kg	1142.8kg	1098.4kg	524.6kg
Average Weight Lost(kg)	5.1kg	3.6kg	3.2kg	3.4kg	2.3kg

*Number reflects weight loss over 1kg.

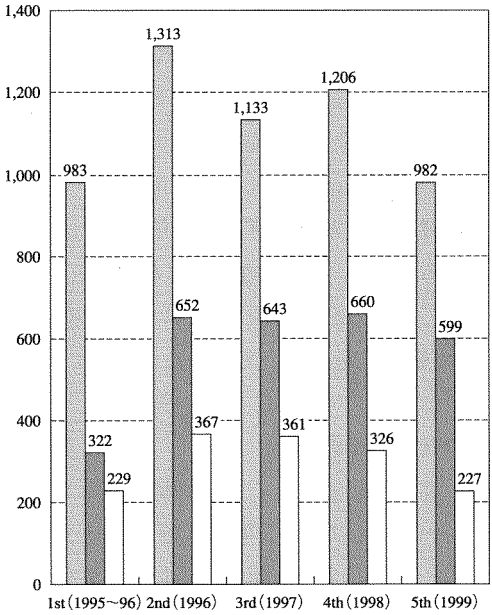

図 4. Tonga Healthy Weight Loss Competitions

Participants Registered　Participants Completing　Participants Losing Weight

事者により顕著であると予想されたことから，第1回の大会では，首都ヌクアロファを中心に，中央計画局，保健省や教育省，郵便局などの政府関係機関に計15ヶ所の測定所が設置された。18歳から65歳までの成人で標準体重を5kg以上オーバーしている者が参加資格者とされ，男性284名，女性699名の計983名が8月に登録を済ませ，以後毎月計量を行うこととなった。しかしながら，1月の大会終了時まで参加した者は322名（男性119名，女性203名）であり，完遂率は32.8%（男性41.9%，女性29.0%）に過ぎなかった(Coordinators 1996a)。報告書は，この完遂率の低さは多くの参加者が思

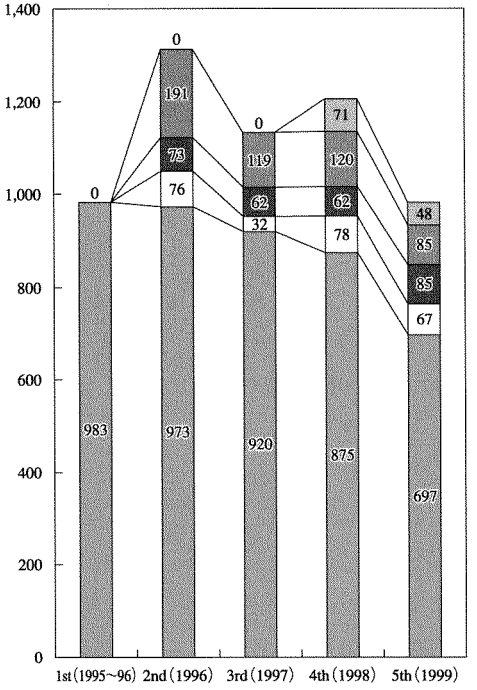

図5. Tonga Healthy Weight Loss Competitions (Participants of Each District)

Tongatapu ‘Eua Ha‘apai Vava‘u Niuatoputapu

い通りに減量できなかったことに戸惑いを感じ，結局は測定所から足が遠のいてしまったためだと述べている。ところで，大会期間中の12月4日に「健康徒歩大会」が初めて開催された。これは，減量大会参加者をサポートし，減量大会に対する国民の関心を高め，健康のための運動としてウォーキングを奨励することを狙った催しである。当日，ヌクアロファのウォーターフロントで8km余りのウォーキングに約300名が参加し，参加者には記念品としてTシャツが配られた。また大会期間中には，保健省健康教育課によってラジオやテレビで減量大会についてのニュースが流され，健康的な食事や減量方法などについての教育番組が放送された。さらに無料のエアロビクス教室が定期的に開かれたり，健康問題についての討論会・ミーティングなどが行われた。こうして1996年2月3日に国王の臨席のもと減量大会修了式典が催された。同日に徒歩大会も開催され，約400名がウォーキングに参加した。第1回大会の優勝者は25.5kgの減量に成功した男性で，上位5名はいずれも19kg以上の減量に成功し，彼らを含めた上位入賞者は修了式典で表彰され賞品（オークランドまでの往復航空券，商品券，離島への乗船券など）を授与された。大会の完遂者322名（完遂率32.8%）中，1kg以上の減量に成功したのは229名(71.1%)，総計すると1,168kgの減量で，減量成功者は一人当たり約5.1kgの減量を達成したことになる。大会はニュースメディアの注目を集め，第1回のトンガ健康減量大会は国民の健康意識の改革という点ではある程度の成功を収めたと言える。

第2回減量大会は，1996年4月から9月にかけて行われた。4月と5月に参加者の登録を受け付け，前回同様に18歳以上の成人で標準体重を5kg以上オーバーしている者が参加資格を得た（65歳以上の希望者は医師の許可があれば参加できるようになった)。測定所は，トンガタプ島で15ヶ所から23ヶ所に増え，またエウア，ハアパイ，ヴァヴァウの離島にもそれぞれ一ヶ所ずつ設置されて，計26ヶ所となった。大会登録者数は1,313名（男女比不明）に増加し，各測定所担当者の養成を目的としたミーティングが定期的に開かれ，またダイエットや運動療法についてのチラシ，健康的な食物を解説したポスターや健康徒歩大会のポスターなどが配布された。徒歩大会もヌクアロ

ファで毎月1回，ヴァヴァウでは大会期間中に2回開かれ，のべ1,385名(平均すると一回につき173名)が参加した。すでに前年よりヌクアロファの二ヶ所でエアロビクス教室が開かれていたが，離島を含めた幾つかの地域においてもエアロビクス教室が始まり，地域グループと小学校の部からなる競技大会がヌクアロファで開催された。こうして10月3日に400名の出席者を向かえて修了式典が催され，前回同様上位入賞者が表彰された。入賞者の成績は，優勝者の28.4 kgを筆頭に上位4名が20 kg以上の減量に成功するといったハイレベルなものであった。しかし，参加者全体についてみると，完遂率は前回より上がって49.7%となり652名（男性207名，女性445名）が修了したものの，そのうち1 kg以上の減量に成功したのは367名（56.3%）で，減量成功者一人当たり約3.6 kgの減量は，前回の5.1 kgを下回るものであった。減量大会，徒歩大会，エアロビクス教室，月例ミーティングと，首都ヌクアロファを中心としたトンガの健康キャンペーンは2年目に入り軌道に乗り出したと言えるが，報告書は幾つかの問題点を指摘している（Coordinators 1996b)。まず，体重計・資金・スタッフの不足（特に体重計はその多くがすぐに壊れてしまい絶対数が不足した）や，各測定所の設置・調整および測定所担当者の育成の困難さといったインフラ面での問題があげられた。完遂率の低さについては，思い通りに減量ができずに測定所に来なくなるケースのほかに，海外や他の島への旅行のため測定日に欠席してしまうケースがあると指摘された。また，報告書は，減量という概念がトンガ人にとって全く新しいものであり，それが減量大会にとって障害になっているという文化的な問題にも言及している。

大会参加者の要望や大会を毎年行うべきだという関係者の主張をふまえて，1997年6月から10月の4ヶ月間にわたって第3回減量大会が行われた。大会運営スタッフの異動があったり，10月中旬に開催される「世界食糧デー」の前に大会を終了する必要があったため，今回は期間を4ヶ月に短縮した大会となった。測定所はトンガタプ島で33ヶ所に急増し，離島のそれと合わせて計36ヶ所となった。大会登録者は1,133名（男性341名，女性792名）と若干減少したものの，643名(男性172名，女性471名)の参加者が修了し(完

遂率56.8%)，そのうち1kg以上の減量に成功した者は361名（56.1%）であった。しかし，減量の総計は1,142.8kg，減量成功者一人平均の減量値は3.2kgで，前年の数字をわずかに下回った。第3回大会においても引き続き健康徒歩大会，エアロビクス教室，月例ミーティングなどが期間中に行われた。徒歩大会は，ヌクアロファで6回，ヴァヴァウで8月に1回開かれ，のべ680名がウォーキングに参加したが，平均参加者数は前年の173名から97名へと減少した。エアロビクス教室は，ヌクアロファの小学校や5つの地域グループで継続して開かれ，8月には8つの小学校の参加を得て競技会が開かれた。また，全国食糧栄養委員会による栄養学，減量法，生活習慣病，フィットネスなどについてのラジオ教育番組が毎週放送され，健康教育の普及がはかられた。一方，測定所担当者の育成のため，中央計画局と各測定所で定期的な会合がもたれ，18ヶ所の測定所で大会参加者中324名を対象に血圧測定が実施されて(うち105名が高血圧と診断された)，高血圧について説明したリーフレットなどが配られた。また，参加者中567名を対象に健康減量大会で初めて大会の最初と最後の月にBMI値が測定された。4ヶ月の間にBMI値の著しい低下は見られなかったものの，参加者に各々のBMI値を示して彼ら自身がどの程度の肥満の段階にあるのかを教えることにより，肥満に対する意識改革が進められた。こうして10月16日の世界食糧デーの催しと併せて健康減量大会の修了式典が500名の出席者を得て開かれ，減量大会上位入賞者の表彰のほか，エアロビクスのデモンストレーション，ローカル食物の重要性を訴えた展示会などが行われた。

3－3．減量大会の抱える問題点

トンガ健康減量大会も3年目を迎えると，フランス，日本，オーストラリアなどの海外のメディアの注目するところとなり，また減量大会を核とした健康栄養教育は国民の健康問題に関する意識を高めることにある程度成功を収めるようになった。しかし，回を重ねるごとに，大会が依然として抱える問題点，ひいてはトンガ人が直面する健康問題が徐々に明らかになってきたのも事実である。第3回大会の報告書では，減量そのものに関する問題とし

ては，大会後のリバウンドがあげられた（Coordinators 1998）。大会期間中はダイエットに気をつけエクササイズに励んでいた参加者も，大会終了後は元の生活に戻ってしまい結局は体重が戻ってしまうという話は今回のインタビュー調査でも繰り返し耳にした。大会終了後12月から1月にかけて夏期休暇に入り，このホリデー・シーズンに海外から一時帰国する親族を迎え入れたり，逆にトンガから海外の親族を訪ねて長期の旅行に出かけたりすることで，生活のリズムが崩れてしまうのもリバウンドに拍車をかけることになる。さらに，大会で良い成績を残すために大会前はあえて節制に努めずに体重を増やす参加者もいるのではないかという意見も聞かれた。また，依然として大会のインフラ面の問題は解決されておらず，報告書は，体重計の不足（160 kg前後まで計量できる体重計の種類は限られており，また高価である）やマンパワーの不足（測定所担当者の海外移住による欠員や引き継ぎの問題）を懸案事項としてあげている。ところで，魚介類や脂肪分の少ない肉類，野菜類など，健康に良い食物を取るべきであるとは分かっていても，それら推奨される食物は安価で容易に手に入るものでないことが多い。報告書では，そのような状況を鑑みて現実的な健康栄養教育を練り直す必要があると説かれた。また，過体重と健康体重を区切るBMI値をトンガ人の身体に合わせて設定し直す必要性も指摘されている。

文化的な問題としては，減量概念の新奇さに加えて，伝統的な身体観の問題も報告書でふれられている。ポリネシア全般に認められることであるが，伝統的にトンガでは女性が「太っている」（病的な肥満は含まない）ことに価値がおかれていた。確かに，テレビ，映画，雑誌などのメディアの影響により，またニュージーランド，オーストラリア，合衆国との人的交流の結果，スリムであることに価値をおく欧米流の身体観が若者の間に浸透しつつある。しかし，その一方で，依然として現在のトンガ社会において，女性の肥満に対する社会的許容度が（特に年配者の間で）高いというのも事実である。日本を含む欧米社会で考えるところの均整のとれた身体の女性は，トンガ文化の規準では痩せすぎで病気を患った女性とみなされることが多いようだ。また，報告書は，現在の健康状態についてトンガ人は運命論的に解釈する傾

向があるといった伝統的な健康観についても言及し，先に述べた文化的な問題も考慮しながら，トンガ人にあったゆとりある健康プログラムを作成するべきであると指摘している。今後の大会の運営については，減量大会は年次行事とし10月の世界食糧デーの催しと共に大会修了式典を開くこと，徒歩大会とエアロビクス競技会の継続，シピ対策，各大会後の検証作業，などが推奨された。

では，これらの問題をクリアすべくそれ以降のトンガ健康減量大会はどのように運営されていったのだろうか。1998年の第4回大会ではトンガタプ島の測定所は33ヶ所から24ヶ所に減少したが，新たにニウアトプタプ島に測定所が設置されて計28ヶ所となり，国内の主要地域全てに測定所が置かれることになった。登録者数は計1,206名（男性375名，女性831名）で，完遂者数は660名(男性195名，女性465名)，完遂率は54.7%，うち減量成功者数は326名（49.4%）であった。ちなみに減量の総計は1,098.4 kgで，減量成功者一人当たり3.4 kgの減量となった。続く1999年の第5回大会では，トンガタプ島の測定所は22ヶ所に減り，国内に計26ヶ所の測定所を置いて開かれた。登録者数は計982名（男性365名，女性617名）と前年に比べて減少したが，完遂者数は599名（男性206名，女性393名）で完遂率は61.0%に上昇した。しかし，減量成功者数は227名(37.9%)で，前回まで徐々に下がっていた減量成功率は引き続き減少し，さらに減量の総計は524.6 kg，減量成功者一人当たりの減量値は2.3 kgと，減量の数値自体もかなり低下した。

これらの結果を一言でまとめるならば，減量大会は回を重ねる毎に登録者の完遂率が徐々に上昇しているものの，減量成功者の割合は徐々に減少し，成功者一人当たりの減量値も低下していると言える（ただし，今回の調査では，参加者の大会開始時の体重データを入手できなかった；減量値の低下についてはそれらの数字と照らし合わせて検討する必要はある)。すなわち，大会参加者の間に体重を測定するという習慣が身につき出したが，減量大会は(一部の参加者を除いて)ただ体重を測るだけの大会になりつつあると言うことができるかもしれない。当初，登録者は減量に対する強い意志をもって減量大会に参加していたが，回を重ねる毎に健康キャンペーンの催しに登録す

るといった軽い感覚で参加するようになったのではないかと思われる。

一方，健康徒歩大会は，1998年の第4回大会の期間中，ヌクアロファで4回，ハアパイで1回，ニウアトプタプで2回開かれた。のべ258名がウォーキングに参加したが，平均参加者数は37名と前年の97名を大きく下回ることになった。1999年の第5回大会では，徒歩大会はヌクアロファでのみ4月から12月にかけて行われ，のべ338名が参加し，平均参加者数は38名であった。年を追う毎に健康徒歩大会の平均参加者数が激減していることに注目すると，徒歩大会自体は停滞化していると言えるかもしれない[図6]。しかし，大会参加者の中にはエクササイズとして個人的に早朝や夕方のウォーキングを実行してる者もいるようであり，徒歩大会の平均参加者数の減少は，減量

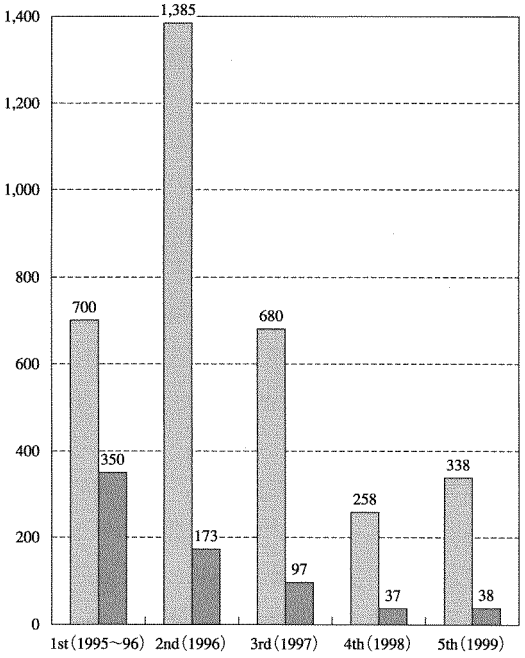

図6. Walk for Health

大会参加者の間でエクササイズを行う者が減少していることを必ずしも意味しないと思われる。ところで，ヌクアロファのテウファイヴァ・ジムではエアロビクス教室が毎週行われており，この教室に通う大会参加者もいる。しかし，受講料は有料であり（一クラス T$2.00，月会員 T$20.00），現金収入のない人は言うに及ばず，平均的な給与所得者（平均給与は T$200.00 から T$400.00 ぐらいだと言われる）にとっても高額であり，法人会員以外の一般のトンガ人には気軽に参加できるものではない。

健康減量大会を中心としたトンガにおける健康栄養教育は，少なくとも都市部のヌクアロファでは確実に人々の間に浸透しているというのが，二度の調査で私が受けた印象である[写真 6，7]。海外との人的交流やメディアの発達によって，トンガ人の健康観が変わってきているのは確かではあるが，国内における健康キャンペーンが彼らの健康意識の改革に果たしている役割は大きいと思われる。しかしながら，健康減量大会に関してみれば，やはり首都ヌクアロファの事務従事者を主たる対象とした大会という性格が強く，本島トンガタプ島においても認知度はそれほど高くないのではないかと調査中に感じられた。たとえば，テレビやラジオの健康教育番組について知っていたり，また居住する地域での早朝ウォーキングに参加したりしていても，減量大会が行われていることについて全く知らないという人が多いようである。第 3 回の測定所リストを見ても，都心部の各省庁，郵便局，警察署，病院，銀行などがその大半を占め，地域コミュニティ全体を網羅しているとは言えない（cf. Englberger et al. 1999）。また，2001 年 2 月の調査時でも，依然として体重計の不足は解消されておらず，またマンパワーの問題も改善されていないように見受けられた（たとえば，報告書の発行は，第 4 回大会以降滞っているようである）。また，大会の運営は海外 NGO の協力にかなりの程度依存しており，トンガ人によるトンガ人のための健康キャンペーンとして機能していない面がある。トンガ健康減量大会は，健康教育の促進に一役買ったもののこのまま都心部に限定されたキャンペーンに終わってしまうのか，それともトンガタプ島全域に草の根的に広がっていくことができるのか（人口や島の広さなどを考えると，離島地域の方が全島レベルで大会を開

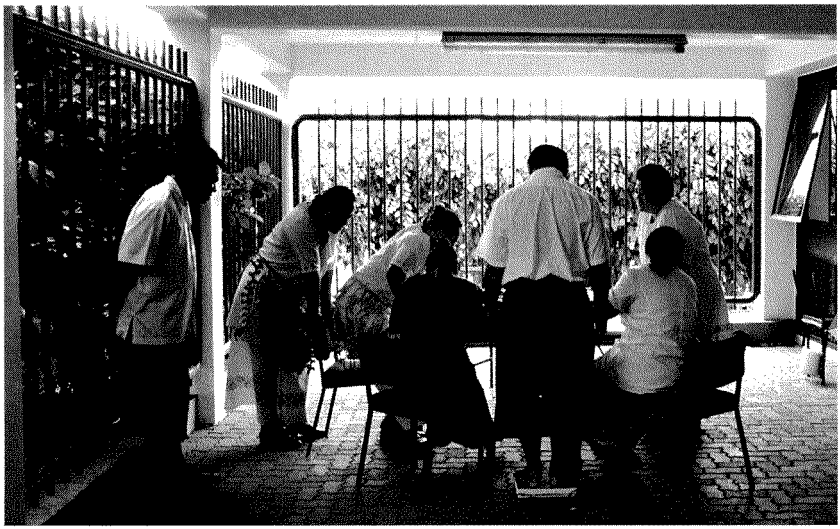

写真６．銀行での体重・血圧測定（減量大会終了後も希望のあった測定所では定期的に測定が行われる）

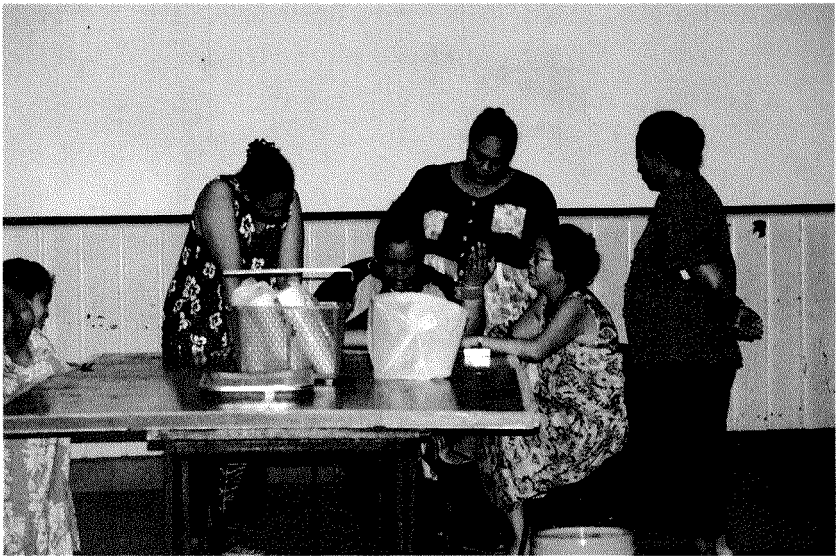

写真７．教会での体重・血圧測定（聖歌練習後のボランティアによる測定）

催することが容易であると思われる)，現時点で即断することはできない。しかし，トンガ健康減量大会は6年目を終え新しい段階を向かえているのは確かである。

4．減量大会参加者へのインタビュー

4－1．トンガ人の身体観・健康観

先に述べたように，伝統的なトンガ文化では女性が「太っている」ことに価値が置かれる傾向があった。また，男性の場合も，均整の取れた筋肉質の巨体は男らしさの象徴とされた。一般に，大柄な体型はトンガ人らしさの重要な要素であったわけでる。ところで，Fusimalohi (1997：320) は，伝統的に価値を認められていた大柄な身体は必ずしも肥満を意味しなかったにも関わらず，現在のトンガ人は肥満をトンガ人らしさの一部と誤解しているのではないかと指摘している。この混同はある程度は翻訳の問題に起因すると言えるかもしれない。トンガ語には元来医学的な肥満を意味する語彙はなく，一般に「太っている」ことを「シノ・ラヒ」(sino：身体，lahi：大きな) という用語で形容し，この用語自体にはネガティブな意味はない。にも関わらず，外来の「肥満」の概念に同じ用語を用いたために，巨体と肥満の混同が起こったと考えられる。トンガ語においても，過度の肥満を指し示す用語 (sino nge'enge'e) はあり，借用語の「フェティ」(feti<fat) という単語もあるが，彼らに太っていることをトンガ語で何と言うのかと尋ねるとまず返ってくる言葉は「シノ・ラヒ」である (日常会話では語勢を強めて「シノ」単独で「太った」の意に用いることも多い)。調査中，あるインフォーマントに「シノ・ラヒは大きな身体の意味であって，太った身体とは違うのではないか」と尋ねたことがあるが，「大きい (big) も太った (fat) も同じだ」と愛想のない返事が返ってきた。言語を通しての伝統的身体観の再構成には詳細な認知言語学的研究が必要とされるものの，このような反応から「肥満」概念はトンガ文化に土着のものではなかったことを推測することができるかもしれない。

身体を形容する用語に関する文化的な誤訳といもいうべき現象は，ハワイ人の間にもみられる（もっとも彼らの場合は，トンガ人と違ってバイリンガルな状況にはない)。ハワイのピジン英語でハワイ語からの借用語である「モモナ」(momona)とは過度に太っていることを意味し，ピジン英語の文脈ではポジティブな意味を持つことは少ない。しかし，ハワイ語の授業などで教師がハワイ人の生徒に強調するのは，元来「モモナ」は太っているという身体的特徴だけでなくふくよかな女性が持つ優雅さを示す言葉であるという点である。ハワイ人女性の容姿を形容するのに同じ「モモナ」という単語を用いても，ハワイ語の文脈(現在そのような状況はあまりなさそうではあるが)と英語の文脈では意味が全く変わってしまうのである。トンガの場合は，バイリンガルな言語状況であるので，用語法の混乱にさらに拍車がかかると考えて良いだろう。

かつては健康であったとされる大柄なトンガ人の身体が，食生活の西洋化・近代化によって近年様々な生活習慣病に冒され始めたという認識は，現在のトンガ人の多くが共有している。たとえば，「トンガ人は昔はイモ，魚を食べていたので太っていても健康だったが，今は外国から入ってきた肉，脂肪分の多い食べ物，甘味料を使った食べ物を食べるようになってきたので，心臓病，糖尿病などの病気にかかっている」「昔はトンガ人は大きくて強かった（big and strong)。だが，今は外国からの食べ物のせいで，太って（fat)しまった」「外国の食べ物を食べてはいけないというわけではなく，食べる量が問題だ」といったコメントはしばしば耳にするところである。このような認識は国をあげての健康教育の成果とも言えよう。しかし，シピに代表される外国の食べ物のためにトンガ人の健康状態が悪化したという語りに比べると，栄養調査報告書（Committee 1987）が指摘したようなライフスタイル全般の近代化による運動不足が原因であるというような語りは前面には出てこないような印象を受けた。もちろん，減量大会参加者とのインタビューでリバウンドの話題になれば運動不足の問題がふれられることはある。また，日常会話のやりとりの中でトンガ人の肥満について語る時，その理由として「怠け者だから（lazy)」「動かないから（don't move)」といった意見が出てくる

こともあるが，ライフスタイルの近代化のゆえにそのようになったということではなく，トンガ人が本来もっている傾向として語られることが多いようである（インタビューでは自動車の利用によって運動不足になる点について言及されることはあった）。

ところで，トンガ人は身長や体重を測る習慣がないと言われる。減量大会の測定所のある担当者によれば，多くの大会参加者は大会に参加するまでに身長と体重を測ったことがなく，測ったことのある人は離島間を飛行機で移動したり海外旅行に行くことのできる経済的に余裕のある人たちに限られるという。体重を初めて測った大会参加者から測定所で彼女が尋ねられた質問は「この○○○ kg という数字は良い値なのか悪い値なのか」というものであったという。日本を含めた西洋社会において我々は体重を身長に照らし合わせて把握するという習慣を身につけている。BMI 値を算出して自分の肥満度を捉えることまでしなくとも，身長何センチに対して体重何キロならほぼ標準体重だろうというような日常生活レベルでの（よってアバウトな）身体の数値化という作業を無意識的に行っている。しかし，現在の多くのトンガ人にとって，（日本の健康な若者にとって血圧値や血糖値がそうであるように）体重値や身長値は全くのマジックナンバーであって，前述したような質問が発せられることになるわけである。2001 年 2 月の調査では減量大会参加者 9 名にインタビューを行ったが，さすがに体重については皆即座に答えたものの，彼らの中で自分の身長を答えることのできた者は一人だけであった（その彼も体重はメートル法，身長はヤード法で答えており，身体の数値化が身に付いているようには見受けられなかった）。このような状況を考えると，トンガ人の間に体重を測るという習慣を根付かせるきっかけを作ったという意味でも，トンガ健康減量大会の果たした役割は小さくない。

4－2．大会参加者インタビュー

2001 年 2 月に首都ヌクアロファにおいて減量大会参加者に集中的に英語によるインタビューを行ったが，インタビュー記録の詳細な分析は完了していない。ここではフィールドノートのメモより 9 名のインフォーマントのイ

ンタビューの要約または一部を紹介することで，減量大会参加者達の具体的なイメージを把握する一助としたい（減量大会終了後も希望する測定所では定期的に計量を行っており，括弧内の身長と体重は中央計画局で管理する最新データを参照した）。

1）A. M.（56 歳の主婦。身長 160 cm，体重 108 kg。）

ヌクアロファ出身で，子供が 8 人いる。大会開始当初より毎年参加している。大会に参加して初めて自分の体重を測った。第 1 回大会では 114 kg から 95 kg まで 19 kg の減量に成功し，3 位に入賞した。大会についてはラジオ放送で知り，初回は郵便局の測定所で登録したが，体重計が壊れてしまったので中央計画局で登録するようになった。第 1 回大会では，一日三食規則正しく食事を取り，量は少なめにして，夜はお茶で我慢した。また，毎朝毎晩ウォーキングをした。しかし，減量大会の回を追う毎に体重が減りにくくなり，一昨年は 6 kg の減量，去年は 3 kg の減量に終わった。減量が上手くいかなくなったのは，以前と比べて休み（rest）を取りすぎて，エクササイズを何もしなくなったからだと思う。今まで重い病気にかかったことはないが，先週右膝の痛みがいよいよひどくなったので病院に行った（注：インタビュー後，椅子から立ち上がるのも辛そうな様子だった）。トンガ人が太ったのは，休み（rest）の取りすぎとシピの食べ過ぎが原因だと思う。

2）M. L.（47 歳の男性銀行員。身長 173.5 cm，体重 89 kg。）

ヌクアロファ出身で，銀行のマネージャーを勤める。ニュージーランドに行く時に空港で初めて体重を測った。つい最近ヴァヴァウ支店から本店に戻ってきた。1984 年に結婚し，フィジーに留学して学士号を取り，90 年にオーストラリアで修士号を取得した（妻も一緒に留学して修士号を取得した）。減量大会はヴァヴァウにいる頃からラジオ放送で知っていたが，実際に初めて参加したのは去年の第 6 回大会である。97 kg から 92 kg まで 5 kg の減量に成功し，大会終了後も毎週測り続け去年最後に測った時は 89 kg まで減っていた。大会中に行ったことは，片道 25 分の徒歩通勤，仕事が終わってから 2

時間のエクササイズ（テウファイヴァ競技場で1時間のウォーキングをした後にジムでリフティングまたはエアロビクス）とダイエット（昼は野菜中心）などである。学生時代は75 kgぐらいだったが，結婚後太りだした。仕事，育児，勉学（留学）で忙しくなり，さらに地位が上がるにつれて色々な職務が増えたため運動する時間がなくなったからだと思う。やはり若い頃の体調の良さを知っているので減量をしなければならないと思う。自分の場合，高血圧予防のためにも減量の必要を感じる。大会終了後ホリデー・シーズンに毎年訪問しているニュージーランドの親族のところに出かけ，さらに今年はシドニーにも旅行に行った。その間にダイエット，エクササイズとも中断してしまい，不摂生な生活から体重は増えてしまった。大会に参加した去年は体調も良く病気もしなかったので一度も仕事を休まなかった。健康であれば仕事を休まずにすむ。組織（雇用者）にとっても，生産性が向上するので好ましいことである。シピはウム料理の一品として月に一，二度食べる程度で，砂糖の量も控えている。健康教育の面では，ただ単に健康に良い食べ物を紹介するだけでは不十分だろう。美味しくて健康に良くて手頃な値段の健康食の作り方を教える必要がある。都市部以外で健康減量大会があまり知られていないのなら，パンフレットなど配布してもっと宣伝すべきである。教会毎に測定所を設けるという方法が最も有効だと思う。教会には測定所として使用できるホールがあり，教会には多くの若者が集まる。トンガの健康問題を本当に改善したいのなら，彼ら若者に焦点をあてるべきだ。いずれにせよ意識改革が大事である。自分の健康は自分のためだけでなく，子供達のためでもあると考えるべきだ。減量大会についてみれば，多くのトンガ人は「調理をして味見をしてそのままほったらかしにする」といった態度で参加しているのではないだろうか。

3）T. L.（32歳の男性銀行員。身長185 cm，体重120 kg。）

ヌクアロファ生まれだが，幼い頃からヴァヴァウで過ごした。1988年から1996年までラグビーのナショナル・チームの選手だった。新聞記事を読んで大会について知っていたが，職場の同僚に誘われて去年の大会に初めて参加

した。大会では134 kgから116 kgに体重が減った（記録上は132.5 kgから120.1 kgへの減量）。大会中は，朝5時に起きてテウファイヴァ競技場のトラックを5 km走り，夕方はジムで筋肉トレーニングをし，夜は早めに寝るように心がけた。だが，今は120 kgにリバウンドしてしまった。自分が太りだしたのは現役ラグビー選手を引退してからだ。結婚したことはそれほど影響していないと思う。むしろ妻は太り気味であることを常に注意してくれるので，結婚したことは健康管理には良かった。現役選手の時には常に体重管理をしていた。本当に良いプレーヤーでいたいのならそうすることが当たり前だった。今もラグビーのコーチなどをしているので過度な運動不足ではないと思う。食べ物については，健康に良い食品は分かっていても，一般のトンガ人にはお金の問題もあり，どうしても安くて量の多いものを買ってしまう。自分は，ラグビーで膝を怪我したことはあるが，今まで大きな病気をしたことはない。減量大会で良い成績を取るのは二の次だと思う。やはり健康な身体を維持するのが一番の目的である。

4）J. M.（31歳の主婦，商店勤務。身長171 cm，体重91 kg。）

ヌクアロファ出身で，アメリカ人と結婚し3人の娘がいる。去年の減量大会に初めて参加したが，大会については以前から知っていた。大会の3ヶ月前からすでにダイエットを始めていて125 kgあった体重を105 kgまで減量していた。自分がダイエットとエクササイズをやっているのを知った友人に誘われて，テウファイヴァ・ジムで登録し大会に参加することになった。大会中に105 kgから86.3 kgに減量することができた。減量中（および大会中）には，夜に食べるのをやめて，野菜，フルーツ，オタイ（すいかジュース），魚類を中心とした食事を取っていた。でも，普段は日曜日にウム料理を食べる。また，毎朝5時にテウファイヴァ競技場のトラックを15周ウォーキングし2周ジョギングしてから，30分間のエアロビクスを行っていた。ホリデー・シーズンにダイエットとエクササイズを中断してしまったのでリバウンドし，現在体重は91 kgになってしまった。今はエクササイズを再開している。自分が太り出したのは子供を生んでからだ。子供ができる前の体重は80 kg

ぐらいだったのではないかと思う。トンガでは，出産後，母親は母乳を出すために食べろ食べろという感じになってしまう。体重を初めて測ったのは大会の3ヶ月前にダイエットを始めた時だったと思う。それ以前に測ったことはあるかもしれないが覚えていない。

5）F.L.（37歳の主婦，ファレコロア経営。身長172 cm，体重152 kg。）

ハアパイ出身で，4人の子供がいる。金曜と土曜は夫と息子にファレコロアの店番を頼むが，それ以外の曜日は自分が店番をしている。減量大会には3年続けて参加している。初めて参加した時は6 kgの減量に成功し130 kgになった。その次の大会では3 kgの減量に成功。去年の大会では減量できなかった。3年前に電力会社を退職しファレコロアの店番を始め，今は一日中店の中で座っている。一日中家にいて（自宅前にファレコロアがある）いつでも食べられるので，減量ができないのだと思う。この3年間は離島からやってきた親戚が家に同居していて家事をやってくれていたので自分は家事をせずにすんだ。でも2週間前に彼らが島に戻ったので今は自分が家事をしなければならず，そのおかげで3 kg自然に体重が減った。大会には勤めていた電力会社に中央計画局から連絡があって職場グループとして参加したが，現在はバシリカ教会に登録している。今まで大きな病気をしたことはなく，妊娠中に血圧が高くなったぐらい。自分はハアパイ育ちで魚をたくさん食べていたのでそれが身体に良かったのかもしれない。17歳で進学のためトンガタプ島に来て，22歳で結婚したが，第一子出産後に太り出した。臨月の時で体重は80 kgぐらいで，妊娠前はそれより軽かったと思う。4人の子供は全て母乳で育てなかったにも関わらず，出産後はたくさん食べていた。

6）T.O.（35歳の男性，警察署勤務。身長176 cm，体重101 kg。）

ヌクアロファ出身。大会には一昨年と昨年続けてテウファイヴァ・ジムで登録して参加した。大会については中央計画局のスタッフから直接知らされ，彼らが事務所に直接やってきて測定してくれた。大会中にはエアロビクス，ランニング，ウエイト・トレーニングなどのエクササイズを行った。食事に

ついては特にダイエットはせず，朝はシリアルにジュースを取り，昼はツナ・サンドイッチやトマト・サンドイッチを作って食べ（忙しい時は買う），晩は鶏肉や魚とイモやパンの実を中心に食べるといったもの。しかし，大会後はあるものは何でも食べていたと思う。去年の大会では 110 kg から約 100 kg に減量することができた。現在，テウファイヴァ・ジムで週に 3 回ほどエアロビクスのインストラクターを勤めている。仕事が忙しい時にはキャンセルすることもある。参加者は朝の部で 15 名，夕方の部で 30 名から 40 名ぐらいである。学生時代はラグビーをやっていた。当時の体重は 95 kg から 100 kg ぐらいだったが，腰を痛めてラグビーができなくなった。自分としては当時のベスト体重の 95 kg ぐらいまで減量したいと思っている。自分の体重を初めて測ったのは学校だったと思う。当時は学校でラグビーをする際には，年齢別ではなく体重別にチームを編成していたため。年に一度健康診断を受けているが今のところ問題はない。怪我を除けば大きな病気をしたことはない。食事に関して言えば，シピはできるだけ避けて魚や鶏肉を取るようにしているが，日曜のウム料理にはシピを食べることもある。トンガ人が太ったのは，コンビーフやシピなど脂肪分の多い食べ物を輸入するようになったから。自動車が増え，近所に行くのにも車を使うようになって歩かなくなったのも原因の一つ。また，仕事が忙しくてエクササイズに割く時間的余裕がないのも一因だと思う。解決策としては，人は安価な食べ物を選択するので，政府レベルで脂肪分の多い食べ物の輸入を規制し価格コントロールをするのが良い。また，肉類にかわって魚類の流通を拡大するべきだと思う。

7）A. K.（52 歳の女性銀行員。身長 169 cm，体重 142 kg。）

ヌクアロファ出身で，子供が 1 人いる。大会には第 1 回から銀行で登録して参加している。去年の大会では 3 kg の減量に成功した。大会についてはラジオや新聞の宣伝を通して知っていた。中央計画局のスタッフがリーフレットを持って銀行に参加の呼びかけに来る。普通，大会の一ヶ月前から中央計画局が宣伝を始める。大会中には，週に一，二度ジムに通ったり，月に一度の健康徒歩大会に参加したり，早朝に散歩をしたり，教会礼拝に時々徒歩で

出かけたりした。また，甘い食べ物，脂肪分の多い食べ物，デンプン質の食べ物をひかえるようにした。大会中の一日の食事は，朝は食べず，ティー・ブレイクは皆が持ち寄ったフルーツなどを食べ，昼にたくさん食べて，晩はフルーツを中心にしたものだった。普段は，通勤にタクシーを利用しているが，週に一，二度歩いて帰宅することもある。普段の食事は，ウイークデーは朝食を取らず銀行のティー・ブレイクに軽食を取ることが多いが，週末は朝食を取っている。やはり夕食が一日の食事の中心になるが，例えば昨日の夕食は，パンの実，バナナ，コンビーフ・スープに生魚だった。自分が太り出したのは出産後で，妊娠する前は体重は 100 kg ぐらいだったと思う。自分の理想的な体重は 87 kg ぐらいだが，そこまで減量するのはちょっと無理な気がする。急に太り出した理由の一つに怠惰(lazy)だったことが考えられる。自分が初めて体重を測ったのはニュージーランドに行った時だったと思うが良く覚えていない。いずれにせよ，減量大会が始まるずっと前のことである。

8）A. P.（46 歳の女性，教育カリキュラム開発課勤務。身長 163 cm，体重 107 kg。）

トンガタプ島ヴァイニの出身で，５人の子供がいる。２人の息子も教育関係（教師）の仕事に就いている。大会には 1998 年頃から職場グループとして参加している。大会中は中央計画局から日本人ボランティアが体重を測りに来てくれる。去年の大会では，112 kg から 107 kg へと 5 kg の減量に成功して賞をもらった。去年，福岡市で開かれたコンファレンスに出席するために，８月から９月にかけて約２週間日本に滞在したが，その時によく歩いたので自然にダイエットができたのだと思う。大会中には，家の掃除など家事をしてできるだけ汗をかくようにした。また，食事の量をできるだけ減らして，野菜を多く取り，肉類を減らすよう努め，夜７時以降は食べないようにした。帰宅後に軽いエクササイズをしたり，日が暮れてから家の回りを歩いたりした。結婚前の体重は 65 kg ぐらいだったと思うが，出産後太った。28 歳の時に最後の子供ができたが，それまで子供を生む度に太っていったと思う。トンガでは，出産後に母乳をたくさん出せるようにと祖母が母親によく食べさ

せる習慣がある。また，自分の場合，娘達が大きくなるにつれて家事をこなすようになり，自分の家での仕事が減って，結局動かなくなって太ってしまったのだと思う。普段の食事は，朝はお腹が空いていないので食べず，職場のティー・ブレイクに持ち寄ったケケ，バナナ，パンにバター，などをたくさん食べる。昼食もティー・ブレイクの時とほぼ同じ内容だが，缶詰の魚とパンでサンドイッチを作って食べることもある。夕方は6時から7時頃に，イモ，パンの実，魚介類などのトンガ料理を食べる。自分はあまりシピは食べない。魚の方が好きだが値段が高い。今まで大きな病気をしたことはないが，一日に20本ほどタバコを吸うので，心臓のチェックを病院で受けたいと思っている。初めて自分の体重を測ったのは，子供の頃，父親のコプラ作業場のはかりに乗った時だったと思う。健康診断，体重測定として初めて測ったのは，出産後に急に太ったので医者に診てもらった時だった。自分としては100 kgから105 kgぐらいに体重を落としたい。トンガ人がなかなか減量できないのは，我々がそれほど健康に価値を置いていないからだと思う。とにかく長生きできればそれで良いと考えている年配の人々が多いのではないか。また，多くの義務，しなければならない事（教会での役割分担，冠婚葬祭，教会の様々なミーティングなど）があり，忙しくてエクササイズをする時間がないのも原因の一つだと思う。健康的な生活を送るにはある程度強制的な指導が必要かもしれないが，トンガ人は怠惰（lazy）だ。

9）A.F.（54歳の女性，教育カリキュラム開発課勤務。身長不明／約165〜167 cm，体重107 kg。）

ヴァヴァウ出身で，7人の子供がいる。大会には1997年に初めて参加した。新聞やラジオで知り，職場から参加した。去年は中央計画局で登録して参加し，結果は1 kgの減量だった。朝と昼には食べず，ティー・ブレイクの時にブランチとして食事を取り，晩にたくさん食べるというのが，大会中の自分の食生活だった。夕食には，魚，タロ，タピオカ，ペレ，鶏肉に野菜，パンの実，そして時々シピなどを食べる。エクササイズの方は，汗をかく程度の軽い運動を行っていた。1996年に父，弟，息子と相次いで肉親を亡くし，ス

トレスから心臓病を患ってしまい，一月に一度の割合でクリニックに通い，医師に軽いエクササイズをするように勧められた。その後，時折クリニックに通って心臓のチェックを受けている。1978年にヌクアロファに出てきて下の二人の子供を出産した。自分が太り出したのはそれからである。たぶん，ヌクアロファに来てからは歩かなくなったからだと思う。普通，出産後，母親の家事を手伝うために彼女の母や姉妹がやってきてしばらく同居する。母親は育児に専念できるようになるが，動かなくなってしまう。また，出産後には，母乳が出るようにと親戚や友人が食べ物をたくさん持ってくる。そのため，女性は出産後急に太り出すのだと思う。自分が初めて体重を測ったのは1989年にニュージーランドに留学に行った時だった。1年3ヶ月後トンガに戻った頃で109 kgぐらいだったが，それ以降あまり体重は変わっていない。トンガ人がなかなか減量できないのは，忙しくてエクササイズをする時間がないからだと思う。私のように働いている女性の場合，仕事に加え，教会の様々な行事，朝のアイロンがけなどの家事などで，忙しくてなかなか時間を作れない。通勤に車を使ってしまうのも原因の一つだろう。

4－3．まとめ

民族誌学的インタビュー調査では様々な技術的な問題が生じる。まず第一にあげられるのが使用言語の問題である。トンガの場合，都市部の住民の多くがバイリンガルなので，英語によるインタビューに特に支障はない。しかし，インフォーマントの英語能力にはかなりの差があり，英語の不得手なインフォーマントは，微妙なニュアンスを伝えることができずに言いたいことを簡潔な英語表現に意訳して説明してしまうことが多くなる。また，英語が堪能なトンガ人もトンガ語でインタビューを受ければ，英語を使用した場合と異なった返答をする可能性が高い。質的インタビューによって情報を収集しなければならない調査の場合，やはり現地の言語である程度のコミュニケーションが取れる方が望ましい。調査者が現地語を自由に操ってインタビューを行うことができれば翻訳の問題が全て解決するわけではないのは周知の事実であるが，それでも質的データを収集するためには言葉はできない

よりできる方が良いだろう。

トンガにおいてインタビュー調査を行う際に言語の問題以上に注意を払わなければならないのは，トンガ人のコミニュケーションの特性である。ある程度現地社会に精通した人たちの間で，いわゆるトンガ流のコミュニケーションを説明する時に「トンガ人は相手の望んでいることを答えようとする」「トンガ人は相手の期待に応えるように返答する」といった言い方をする場合がある。例えば，トンガ人がある面会の約束を受け入れた場合，彼はいつどこで会うということを了承したのではなく，その申し出がなされた場面での相手とのコミュニケーションを円滑にするために(相手の期待に応えるべく)面会の約束を受け入れるというのである。だから，彼が約束の日時に現れなかったからといって，それは彼が約束を忘れたり，故意に約束をやぶったのではないというわけだ（もちろん本当に忘れてしまうことはあるだろうが)。これはトンガに限らず，ポリネシア文化に共通するコミュニケーション特性と考えられるかもしれない(cf. 山本 1997：160-161)。このような解釈を一種のステレオタイプ的理解として切って捨てることはたやすいが，それでもそこにはある程度の真実が含まれることは確かだと思われる。日常生活のコミュニケーションで多少なりとも上に述べられたような傾向があるとすれば，外国人研究者による調査インタビューのようなフォーマルな場面で，相手の期待に応えようとして，また自らを辱めることのないように，調査者の質問に上手に返答をしようとするのはごく自然な態度であろう（勿論，程度の差はあれ，どの社会の人々にもその傾向はある)。このようにして発せられた彼らの言葉は必ずしも真実を語っているわけではないが，むしろそのような語りにこそ彼らの間で共有されるエミックな視点を見いだすことができるのではないだろうか。

以上の点を考慮しながら，先に紹介した 9 名の減量大会参加者のインタビューから，現在のトンガ人の健康問題や健康観について幾つか重要と思われる点をあげてみたい（安易な一般化を避けなければならないので，あくまで彼らのコメントから予想される問題点としての指摘にとどめたい)。トンガ人の男性はスポーツをやめた後や結婚後に徐々に太り出すようだが，女性の

場合は子供を出産した後に急激に太り出し，その後子供ができる度に太っていくようである。その理由として，出産後母乳が良く出るようにと親族が母親にたくさんの食物を食べさせたり，母や姉妹がしばらく同居して家事を分担するために母親が運動不足になることが考えられる。また，一般に環境の変化をきっかけに太ることが考えられる（離島からヌクアロファに移住してから歩かなくなったり，退職後ファレコロアの店番で運動量が減ったりして)。ところで，健康減量大会の連続参加者は回を重ねる毎に体重が減り難くなっているようである。大会終了後に多くの参加者がリバウンドしていることを考えると(大会開始時より増量していることも考えられる)，長期的にみて減量大会への参加は，健康意識の改革という面で効果はあっても減量そのものの効果がそれほどないと言って良いかもしれない。

トンガ人が太った理由としては，予想通り，ライフスタイルの近代化の過程で起こる脂肪分の取り過ぎと運動不足が，彼らの間では一様に指摘されている。ただし，思い通りに減量できない理由として，忙しくてエクササイズの時間がないという意見には注意を払うべきだと思われる。「忙しくて時間がない」というのは万国共通の言い訳であるが，この場合ある程度根拠のある弁解であるかもしれない。トンガの地域コミュニティはキリスト教教会を中心として成り立っており，日常生活のあらゆるところに教会の影響力が及んでいる。毎週特定曜日に行われる礼拝式や聖歌練習，また年中行事や冠婚葬祭と，教会活動は多岐に渡る。「教会の会合や行事で忙しい」というのは少なくとも敬虔なクリスチャンであるのなら全く根拠のない言い訳ではないのである。そして，年中行事，冠婚葬祭，不定期の行事（送別会や歓迎会）の多くに饗宴の開催が関わっている。うがった見方をすると，饗宴でよく食べる準備をするために忙しくてエクササイズをする時間がない，とも言えるのである。

ところで，太ってしまう理由や減量ができない理由として「トンガ人は怠惰 (lazy) だから」という表現が頻繁に使われる。この表現は，肥満の問題に限らず，あらゆる局面で全ての原因をそれに持っていくように使われる常套句であり，しばしば自虐的に発せられることもある。だが，それはまた節制

や健康管理といった西洋から移入してきた新たな概念・言説を安易に受け入れることを回避するトンガ人の無意識なレベルでの(「抵抗」と呼ぶにはやや消極的な)態度表明のようにも考えられる。また,「健康にそれほど価値を見いださない」という意見があったが,「健康」という概念もトンガ人にとって外来の新奇なものであったのかもしれない。その一方で,留学などを経験した高学歴高収入のトンガ人の中には「健康であることは生産性の向上に結びつく」といった典型的な近代の「健康」言説を身につけている者もいるようである。いずれにせよ,今回の調査のインフォーマントは一人を除いて肥満のために重い糖尿病,心疾患,関節痛などを患ったことのない人たちであった。彼らが減量に満足のいく成功を収めていないとすれば,それは,ある減量成功者の言葉を借りて言うならば,大病をしないと本当の健康の重要さは分からず,したがって大会のためだけの減量になってしまって効果がないということなのかもしれない。

5．今後の研究に向けて

5－1．健康問題の多様性

オセアニアにおける近代化に伴う食生活の変化とそれによって引き起こされる健康問題を扱ったものとして,Bindon (1982, 1984, 1988, 1995) の一連の食生態学的研究がある。サモア人を対象としたもので,基本的な方法論的枠組みは,山本他 (1984, 1985) や足立 (1986 b) のそれと同じである。西サモア (現サモア),アメリカン・サモア,ハワイのサモア人移民の比較研究によって,タロ・パンの実・バナナ,魚介類,ココナツといった伝統的な食事が,米と鶏肉を中心とした近代的な食事に移行し,それに伴って肥満の問題が生じているというのがその要点である。彼は,Neel (1962) の「倹約遺伝子」仮説(飢餓状態に適応してきた人々は,食物豊富な環境に過剰に適応し急速な脂肪組織の増加とそれに伴う肥満や糖尿病を引き起こしやすい)がポリネシア人にあてはまる可能性を認めながらも,実際の近代化に伴う肥満発生のメカニズムはより複雑であることを,肥満の男女差(近代化の過程で

女性の方が肥満の傾向が顕著になる）を明らかにすることで指摘する。伝統的な性に基づく分業形態が近代化のプロセスで男女間で肥満の傾向に差異を生むというわけである。ところで，食生活の近代化とそれに伴う身体観・健康観の変容を考察する際，「食」（食物および食べること一般）や身体に関する文化的・象徴的意味合いを考えることは重要である。Bindon（1988）はタロの持つ象徴的な意味（満腹・充足・幸福感）が近代化（西洋医学の導入など）により変容し，この主食に対するアンビバレントな態度がサモア人の間に生じている点にも言及している。

トンガ都市部の青少年の肥満について研究したFusimalohi（1997）も同様に社会文化的要因の重要性を指摘している。彼女によれば，青少年にみる肥満の男女差（やはり女子の方が肥満の傾向を示すが，この場合性差に基づく分業形態では説明できない）は，ジェンダーの問題として説明することができる。すなわち，トンガ文化において女性はよりステイタスの高い食物（輸入食品＞伝統的な食物）を取ることが期待され，また女性が体力を消耗する作業に従事するのは望ましいことではなく，肉体的に活発であることは避けられる傾向があるため，女子の方が男子より肥満の傾向を示すというわけである。また，トンガにおいて男性らしさは肉体的な特徴（均整のとれた筋肉質の身体）で語られることが多いのに対し，女性らしさは非肉体的な特徴，すなわち従順さ・威厳・器用さなど（その幾つかは頻繁には動かないことに結びつく）で示されることが多く理想的な女性の体型は明確ではないという。トンガでは女性の方が男性より非活動的であること，すなわち女性の行動的傾向が肥満を進める一因であるという指摘は，近代化のプロセスにおいて食生活の変化よりも活動レベルの変化の方がより重大な肥満の原因となっているとする栄養調査報告書(Committee 1987)の結論と整合性があるようだ(cf. Taylor, et al. 1992: 292)。しかし，彼女の議論では青少年の肥満と生活様式の近代化の関連が明確でなく，仮に女性の非活動性が肥満の主要因であるとするとトンガでは元来女性の方が肥満の傾向があったということになってしまう。

Bindon（1995）やFusimalohi（1997）の研究が示すように，性差に基づく

分業形態やジェンダーの問題を抜きにして，非西欧社会における近代化と肥満の問題を語るのは片手落ちだろう。性差に限らず，社会に内包される様々な差異に注目しながら，すなわち社会文化的ファクターに十分な注意を払いながら，非西欧社会における近代化と健康問題，さらには伝統的身体観・健康観の変容を検討する必要がある。第三世界でライフスタイル全般の近代化が進む中，肥満に代表される健康問題そして健康意識の変容は多様な形を取って現れるのである。残念ながら，今回の調査ではその点を十分に考慮して資料・情報収集やインタビューを行ったとは言えない。今後の課題としたい。

5－2．鍵概念の操作的定義の必要性

「肥満」と「近代化」という二つの鍵概念について若干言及しておきたい。本論文でも「医学的な肥満」という表現を用いたが，この客観的に存在するかのような「肥満」も，その測定には BMI (Body Mass Index：体重 [kg]／身長の二乗 [m^2])，TSFT (triceps skinfold thickness)，waist-to-hip ratio など幾つかの方法がある (Pollock 1995a; Taylor, et al. 1992)。また，医学的な肥満は体脂肪率によって定義されるが，体脂肪率の測定が正確になされたとしても（正確な測定は難しいと言われる）いわゆる肥満の基準値は，その値を越えると経験的に糖尿病や高血圧などを起こす確率が高くなるとされる数値（日本人成人男性で25%以上，成人女性で30%以上）として設定されるのである。また，脂肪がどこにつくかによって肥満はさらに「りんご型肥満」や「洋なし型肥満」などに分類される。このように西洋医学においても「肥満」の定義・概念は複雑に入り組んでいるにも関わらず，これまでの非西欧社会の健康問題を扱った食生態学的研究において「肥満」という用語が安易に使われてきたのではないだろうか。医学的な概念であれ，ある社会に特有なエミックな観念であれ，「太った (fat)」「大柄な (big)」「過体重 (overweight)」といった「肥満 (obesity)」と隣接する類似概念（明確に区別されることもあれば，されないこともある）を無批判に用いて非西欧社会における「肥満」の問題を論じると論理的な破綻を招くことも考えられる。例えば，

「大柄・過体重」と「肥満」を明確に区別することなく議論を進めた末に「過去において大柄な身体は美の象徴として奨励されていた。よって，それを『近代化の病(a disease of modernization)』と見なすことはできない」(Pollock 1995b: 107)というような，自明の結論を導き出すことになるのである。ここでPollock (1995 b) の言う「近代化の病」は病的な肥満を指すが，議論されなければならないのは，西洋文明と接触する以前のオセアニア社会において(西欧社会で言うところの)「肥満」という概念がなかった点，すなわち「健康的な大柄な身体」と「病的な大柄な身体(肥満)」の類別化が進んでいなかった点なのだ。

学術論文においてでさえ，伝統社会において(医学的な，もしくは西欧社会で受け入れられているような)「肥満」の概念がなかったにも関わらず，伝統社会では肥満は美の象徴だったという語りがなされうるのだが，「伝統社会では太っていることは美の象徴であった」という語りはさらに問題を複雑にする。なぜなら「太った(fat)」という用語は多分にエミックな観念であり，現代の西欧社会においても，また，例えば過去のトンガ社会においてもそれぞれ違った意味合いをもって人々に共有されると考えられるからだ。「肥満」を通して近代化と伝統的身体観・健康観の変容を考えるのであれば，「肥満」という用語・概念が内包する問題点を自覚的に検討しなければならない。西洋医学の定義に基づく「肥満」およびその「肥満」にまとわりつく医療的言説(その両者に常に西欧社会のエミックな肥満観念が付着しているのだが)に対してトンガ人がどのように対応しているのかを考察するためには，そのような準備的作業が必要不可欠であろう。

一方，「近代化」もその用語自体の内包する問題点に対して自覚的でなければならない鍵概念である。本論文でも検討を加えた足立(1986 b)と山本他(1984，1985)の研究のように，都市部と農村部の共時的な比較調査によって通時的な社会変化を説明するという方法論を用いる際には，細心の注意が必要とされよう。このような比較調査法はあまりに広く採用されているので(e.g. Bindon 1982, 1984, 1988; Taylor, et al. 1992)，ややもするとその方法のはらむ問題点を見落としてしまいがちであるが，空間的差異を時間的差異

に無批判に置き換えてしまうという19世紀の古典的な社会進化論者の犯した誤りは避けなければならない。この問題を回避するには「近代化」を通時的変化ではなく程度的差異を示す概念として明確に定義しなおす作業が有効かもしれない。しかし，仮に「近代化」のレベルを電気・テレビや上下水道の普及率によって定義したり，現金経済の浸透度によって定義したりすることができたとしても,「近代化が進むと食品の種類は多様になり購入食品を利用するようになる；伝統的な食物への依存度が低くなり輸入食品への依存度が高まる」といったトートロジカルな結論を導き出してしまうこともある(cf. Bindon 1982: 59)。これは,「近代化」とは原因（cause）ではなく過程(process)であるにも関わらず,それを因果論的文脈の中で原因として扱うことで生じる問題なのだ。「近代化」の操作的定義に用いられる社会状況（インフラ設備や現金経済）は食生活と切り離して考えるべきものではない。輸入食品の増加や伝統的食物への依存度の減少といった食生活の変化は近代化のプロセスの一部分として他の社会経済的要素（インフラ設備の改善や現金経済の浸透）と相関論的に捉える必要があるのである。本論文では「肥満」と「近代化」という鍵概念に十分に注意を払いながら議論を進めたとは言えない。上述したこれらの概念の内包する問題を整理し再検討することが今後の研究にとって必要不可欠となる。

6．おわりに

現在のトンガは，食生活の変化が及ぼすトンガ人の健康への悪影響を南北問題の文脈で批判する段階から、能動的にそのような変化に対処しようとする段階に移行している。物だけでなく情報も容易に国境を越えて流通する時代において，トンガ人は新たに入ってきた「健康」概念，さらには健康に関する情報や「健康管理」の言説をローカルな社会経済状況を考慮に入れつつ自らの文化に意識的・無意識的に取り込んでいくだろう。近代化の進む非西洋社会において，人々が西洋発信の概念・言説をローカライズしていく過程を明らかにするには，当事者の語りをより広い社会的・文化的コンテクスト

においてイディオグラフィックに研究することがまず初めに必要とされる。本論文では，トンガ人の食生活の近代化と健康観・身体観の変容についてそのような研究を展開するための予備的考察を行った。

謝　辞

1999年1月と10月，2001年2月の現地調査は平成10年度から平成12年度の国際医療協力研究委託費「トンガにおける栄養問題の2面性：肥満・糖尿病と各種欠乏症の効率的対策を求めて」（研究代表者・松村康弘）の補助を受けて行った。お世話になった松村康弘先生，稲岡司先生，さらに本論文の草稿にも目を通してくださった須田一弘先生に謝意を表したい。

現地調査では，中央計画局のVizo Halavatauさん，青年海外協力隊の安達内美子さん，岸田頼子さん，安田美子さんから，様々な情報の提供やインフォーマントの紹介など調査の協力を賜った。また，アフェアキ直子さんの示唆に富むコメントはトンガ社会についての理解を進める上で大いに役立った。インタビューに応じて下さった方々とお世話になった皆様に感謝いたします。

参考文献・資料（英語）

Bindon, James R.

1982　Breadfruit, Banana, Beef, and Beer: Modernization of the Samoan Diet. Ecology of Food and Nutrition 12: 49-60.

1984　An Evaluation of the Diet of Three Groups of Samoan Adults: Modernization and Dietary Adequacy. Ecology of Food and Nutrition 14: 105-115.

1988　Taro or Rice, Plantation or Market: Dietary Choice in American Samoa. Food and Foodway 3: 59-78.

1995　Polynesian Responses to Modernization: Overweight and Obesity in the South Pacific. *In* Social Aspects of Obesity. I.d. Garine and N.J. Pollock, eds. Pp. 227-251.

Committee (the National Food and Nutrition Committee)

1987　The 1986 National Nutrition Survey of the Kingdom of Tonga.

Coordinators (Competition Coordinators)
1996a Tonga Healthy Weight Loss Competition: 1995-1996: Tonga National Food and Nutrition Committee.
1996b Second Tonga Healthy Weight Loss Competition: 1 April 1996-30 September 1996: Tonga National Food and Nutrition Committee.
1998 Third Tonga Healthy Weight Loss Competition: 16 June 1997-10 October 1997: Tonga National Food and Nutrition Committee.

Englberger, Lois, Vizo Halavatau, Yoshiko Yasuda, and Risa Yamazaki.
1999 The Tonga Healthy Weight Loss Program, 1995-1997. Pacific Health Dialog 6(2): 153-159.

Fusimalohi T., Caroline
1997 Adolescent Obesity in Tonga. Ph. D Thesis, Flinders University.

Hau'ofa, Epeli
1988 [1983] Tales of the Tikongs. Penguin Books.

Lal, Brij V., and Kate Fortune
2000 The Pacific Islands: An Encyclopedia. Honolulu: University of Hawai'i.

Neel, James V.
1962 Diabetes Mellitus: A "Thrifty" Genotype Rendered Detrimental by "Progress"? American Journal of Human Genetics 14: 353-362.

Palu, Taniela, Ruth Colagiuri, and Stephen Colagiuri
2000 Tonga Fights Diabetes. Diabetes Voice 45(4): 10-13.

Pollock, Nancy J.
1995a Introduction: An Overview of Obesity Issues Across Several Cultures. *In* Social Aspects of Obesity. I.d. Garine and N.J. Pollock, eds. Pp. xiii-xxxiii.
1995b Social Fattening Patterns in the Pacific-Positive Side of Obesity: A Nauru Case Study. *In* Social Aspects of Obesity. I.d. Garine and N.J. Pollock, eds. Pp. 87-109.

Statistics Department / Kingdom of Tonga
1999 Population Census 1996: Administrative Report and General Tables.
2000a Statistical Indicators 2000.
2000b Annual Foreign Trade Report 1999.

Taylor, Richard, et al.
1992 Dietary Intake, Exercise, Obesity and Noncommunicable Disease in Rural and Urban Populations of Three Pacific Island Countries. Journal of the American College of Nutrition 11(3): 283-293.

参考文献・資料（日本語）

足立己幸

1986 a 「Ⅰ．トンガ式健康法の変化に学ぶ」『トンガ式健康法の変化に学ぶ：カタ太りで健康，その将来』全国食糧振興会編　Pp. 5-13：農山漁村文化協会．

1986 b 「1：食事―問い直される栄養素のバランス」『トンガ式健康法の変化に学ぶ：カタ太りで健康，その将来』全国食糧振興会編　Pp. 14-24：農山漁村文化協会．

1986 c 「5：新しい栄養教育の試み―伝統の生活をたいせつに」『トンガ式健康法の変化に学ぶ：カタ太りで健康，その将来』全国食糧振興会編　Pp. 61-72：農山漁村文化協会．

小池五郎

1984 「トンガ人の栄養と適応」『栄養生態学：世界の食と栄養』小石秀夫・鈴木継美編　Pp. 165-188：恒和出版．

古賀葉月

1997 「王様の減量成功で拍車がかかったトンガのダイエット作戦」『月刊クロスロード』9月号

全国食糧振興会

1986 『トンガ式健康法の変化に学ぶ：カタ太りで健康，その将来』農山漁村文化協会．

松村康弘

1999 「トンガにおける栄養問題の2面性：肥満・糖尿病と各種欠乏症の効率的対策を求めて」国立健康・栄養研究所．

村上伸子

1999 「トンガ王国の漁業開発と魚貝類をめぐる食生態」『太平洋島嶼と環境・資源』小柏葉子編　Pp.161-198：国際書院．

山本敦子

1997 「王様も71キロやせた！トンガ王国国をあげての減量大作戦」『Uno！』6月号

山本妙子，足立己幸，小池五郎

1984 「トンガ成人の栄養素摂取におけるイモの役割について」『神奈川県立栄養短期大学紀要』16：13-25．

山本妙子，足立己幸，Langi Vaea

1985 「トンガ人のイモの摂食状況とイモに対する評価とのかかわり」『神奈川県立栄養短期大学紀要』17：15-24．

山本妙子

1986 「4：食事作り行動―「芋からパンへ」」『トンガ式健康法の変化に学ぶ：カタ

太りで健康，その将来』全国食糧振興会編　Pp. 48-60：農山漁村文化協会.

山本真鳥

1997　「サモア人のセクシャリティ論争と文化的自画像」『植民地主義と文化：人類学のパースペクティヴ』山下晋司・山本真鳥編　Pp.152-180：新曜社.